5. 波田地区における、人と社会の健康づくりを目指した総合的なまちづくりの基盤づくり

地域づくりインターン第4期生・波田地区担当　奥原 芳紀

1. はじめに―本研究の前段として―

地域づくりインターンシップ戦略事業の4期生として、2018年度から松本市の波田地区担当として着任した。波田地区の現状と課題を整理・論述する前に、まずは日本社会を取り巻く超少子高齢化と、長野県松本市のまちづくりに関して記述する。

1－1. 超少子高齢化社会の到来

「少子高齢化」が大きな社会問題として提起されてから久しい。高齢者の激増と出生率の低下により到来する超少子高齢化社会、そして人口減少社会。日本は世界各国の中で最も加速度的に進行している現状である。およそ100年後の2100年には、最悪の場合人口は3,000万人台にまで減少することが推計されており、この数値はほぼ明治時代の総人口に匹敵する。このような大きな人口構造の変化は、人類の歴史上類を見ないものであり、国家規模での社会システムの激変を免れない。将来的に一定割合の自治体が消滅する可能性も存在する。

実際に2043年には高齢化率が36.4％に達し、年間出生数は2018年現在の約4分の３になる。2015年から計算して20～64歳の働き手世代は1818万8,000人も減少する。ちなみに、調査フィールドである長野県松本市においても当然、少子高齢化と人口減少の波が到来する。2040年時点の高齢化率は34.6％に達し、2015年から計算して総人口は3万2702人も減少する見込みである。

少子高齢化が及ぼすものとしては、まず労働力の不足と各業種におけるサービスの低下が挙げられる。これには当然、行政・警察・消防・自衛官・医療・福祉も含まれる。そして社会保障制度における若年世代の負担が増大し、高齢者の孤立化というリスクを抱え、地域社会における自治会の担い手不足や空き家の増加なども懸念されている。

その中、日本政府としては、高齢化の進展に対応して生涯現役を前提にした社会経済システム「生涯現役社会」「健康長寿社会」の構築に取り組む方針である。誰もが健康で長生きできることを望めば、社会は必然的に高齢化する。その観点からすれば、高齢化社会とは「理想の社会」ではないだろうか。平均寿命が延びた分、心身が健康であるならば、定年を迎えたとしても再就職やボランティアなどの社会貢献などにより、社会の中で役割を担い、活躍して頂けるのではないだろうか。一般的に65歳以上であるとされている「高齢者」の基準も、75歳以上、85歳以上と上げていくことで、数値上は「少子高齢化社会」から脱却できる。以上の考え方から、介護予防や健康増進、ICTの活用などにより、与えられた時間を楽しく健康に生きながら、誰もが尊厳のある生き方ができる社会の仕組みづくりを目指している。

1－2. 松本市の目指すまちづくりの方針

松本市は将来の都市像として「健康寿命延伸都市・松本」の創造を宣言し、「松本市総合計画基本構想2020」の第10次基本計画を平成28年に策定した。この「健康寿命延伸都市・松本」の目指すものは、単に体の健康づくりにとどまらない総合的なまちづくりであり、具体的には「人」「生活」「地域」「環境」「経済」「教育・文化」の6つの領域における、「人と社会の健康づくり」を目標としている。

また、同様のビジョンから『「健康寿命延伸都市・松本」地方創世総合戦略』を、前述の総合計画に連なるものとして策定。その基本目標を「生きがいの仕組みづくり」と定め、基本的方向として以下の4点を掲げている。

(1)「健康」を切り口に、雇用の創出や人・投資・情報の集積を目指します。
(2)「松本ならでは」の資源と魅力を戦略的に発信して、地域経済の発展につなげます。
(3)若い世代や子育て世代が、多様な生き方を選択できる社会を育みます。
(4)超少子高齢型人口減少時代においても地域が生きる、成熟型社会の都市基盤づくりを進めます。

世界の誰もが経験したことのない超少子高齢化社会の到来に向けて、平均寿命でなく健康寿命を延ばすこと、命の質や人生の質を高めて「生きがい」を見出すことが求められている。そのため、年代を問わず全ての市民がそれぞれの居場所で生きる喜びを実感し、「このまちに住んでいて良かった」と思って頂けるようなまちづくりを推進している。

以上のことから松本市としては、松本に暮らす人の健康と松本の社会環境の健康を整えることで生きがいづくりの仕組みを構築し、松本ならではの超少子高齢化社会を見据えた地方創生モデルづくりを最大の目標にしていると言える。

2．調査フィールドである波田地区に関して

2－1．波田地区の概要

総人口：15,702人
［男性：7,584人　女性：8,118人］
世帯数：6,176世帯　　町会数：27町会
高齢化率：28.9％
（平成31年2月1日現在）

波田地区（雪と河岸段丘の地形）

波田地区は松本市の西部に位置し、槍ヶ岳を起点とする梓川流域南岸に広がる平坦地と、飛騨山脈より分かれた山岳地帯、並びにこれに連なる山麓平地より成り立っている。総面積は59.42㎢。そのほぼ80％が山間地域であり、太古の昔に自然の力によって、大扇状地と4段の河岸段丘が形成された。西に最高峰標高2,447mの鉢盛山があり、その北東側へ標高900mから600m台にかけて傾斜地が広がり、居住地や耕作地となっている。

居住地には国道158号線とアルピコ交通上高地線、主要地方道塩尻・鍋割・穂高線（日本アルプスサラダ街道）が通り、近隣市村へのアクセスが良好である。また、松本市役所波田支所、松本市立病院、学校、保育園、体育館、文化センター（図書館、多目的ホールなど）、介護・福祉施設などの各種公共施設を擁しているため、居住者にとって安心・安全で心豊かな暮らしを提供できる地区である。そのためか地区の人口は、ほぼ増加傾向である。さらに「松本市立地適正化計画」における「都市機能誘導区域」内の「地域拠点」に波田駅周辺が指定されており、今後の都市計画において松本市西部ブロックの核として重要視されている地区でもある。

平成12年・・・14,432人
平成17年・・・15,178人
平成21年・・・15,201人
（波田町合併記念誌「大いなる波田」より）
平成23年1月1日・・・15,597人
平成24年1月1日・・・15,620人
平成25年1月1日・・・15,614人
平成26年1月1日・・・15,655人
平成27年1月1日・・・15,654人
平成28年1月1日・・・15,656人
平成29年1月1日・・・15,693人
平成30年1月1日・・・15,761人
（松本市統計より）

ここで波田地区の歴史の概略を述べる。かつて波田地区は上波多村、下波多村、三溝村の3村に分かれていたが、明治7年に「波多村」へ合併。その後、村の平和と水田の豊かさを希求して、昭和8年に「波田村」と改名。昭和30年代以降は産業構造の変化を契機に、隣接する松本市のベッドタウンとして人口増加。昭和48年に町制を施行して「波田町」となる。昭和から平成へと元号が変わった後、日本経済の低迷や財政状況の悪化、地方分権の在り方を巡っての様々な議論などを経た結果、平成22年に松本市との合併を決め、現在に至っている。

波田地区においては、四季の移り変わりに伴って様々な姿が映し出される。春には桜の名所と、子供の健やかな成長を願っての仁王尊股くぐり祭で盛り上がり、夏には全国的に有名な特産のスイカや、松本市内最大規模の花火大会を楽しむことができる。また秋には、3つの神社の盛大な祭礼で波田地区内から大勢の人が集まり、冬には一面の雪景色や、波田支所で行われるイルミネーションイベントを楽しめる。以上は一部のもので

あるが、このように、通年で波田地区ならではの多くの魅力に触れることができる。またそれに加え、かつての巨大寺院の遺構や伝統的な町並み、前述の地形により作り出された、松本平を一望できる風景も、波田地区を象徴するものである。それら全てが波田地区における貴重な地域資源であり、それに関わる地区住民の営みも同様である。

地域活動に対しても非常に熱心であり、地区内では様々な団体が精力的に活動を続けている。松本市との合併後に設立された「波田まちづくり協議会」、地域振興のため独自事業を展開する「波田商工会」、合併前に設立され、地域福祉の向上のため活動する大規模な「波田ボランティア協議会」、地元の男性が主体となるボランティア団体「花咲かじいさんの会」や「山毛欅の会」、その他に100を超える波田公民館利用団体など、枚挙に暇がないほど多くの組織・団体が地域の中で活躍している。

その中、将来的な少子高齢化社会の到来とそれに伴う地域社会の変化を見据えた上で、波田地区地域づくりセンターや波田まちづくり協議会などを中心に、波田地区独自の地域づくり事業を展開している。具体的には、地区単位での地域づくりに関する学習会、シンポジウム、町会単位での地域活動推進、地域ポイント制度（ボランティア活動やまちづくり活動に参加することでポイントが付与され、それを地区内商店で利用できる制度）の創設などが挙げられる。目標は『「元気」で活動する高齢者づくりと高齢者に「感謝」する人づくり』であり、既存の地域活動の活性化、新たな地域活動の創出、それらによる地域包括ケアシステムの構築と醸成、地区内の住民と支えあい体制の循環、波田地区の更なる発展を目指している。

上波田地区の町並み

21区町会から見下ろす松本平

2－2. 波田地区の課題

インターンとして配属された1年目は、波田地区を知り、学ぶために可能な限り各種事業、行事、会議等に出席させて頂いた。その中で伺ったことや経験させて頂いたことから、波田地区としての課題を以下の4点にまとめた。

(1)将来的な少子高齢化の進行

波田地区は松本市内35地区の中で3番目に人口が多く、人口も増加傾向にあることは前節で述べた通りだが、65歳以上の高齢者人口は市内で最多の地区となっている。現に波田地区の高齢化率は28.9％であり、松本市平均の27.6％を若干上回っている。高齢者人口に対する要介護者・要支援者の割合は松本市平均の17.4％に比べ14.9％と少ない数値になってはいるが、今後2025年にはいわゆる団塊の世代が75歳以上となることから、健康面でのリスクが高まり地域社会に様々な影響を及ぼすことが十分予測される。実際に波田地区を担当する松本市の西部地域包括センターには、認知症や介護に関する相談が急増しているという現状である。（数値は、平成31年2月1日現在の松本市統計によるもの）

(2)地区内ボランティアへの支援の必要性

前述の通り、波田地区には大規模なボランティア協議会が存在し、各団体が精力的に活動を展開している。この活動は20年以上もの間継続しており、各種医療・福祉施設での活動や町会単位でのサロン運営など、内容も多岐にわたっている。現在のメンバーの90％以上が女性であり、かつ85％が66歳以上の方であるが、男性によるボランティアも活動されており、力仕事などにおいて女

性ボランティアを助けている。このような現状の中、80％以上の方々が今後もボランティア活動を「続けたい」と感じている。その理由として多いものが「他人や地区の役に立っている感がある」「仲間ができた」「生活の張りになる」というものであった。

波田地区社会福祉協議会としては、今後も現在のメンバーの方々が、元気に活き活きとボランティア活動を継続できるように、交流会などの様々な支援策を実施している。高齢者やボランティア活動に関する研究資料から、高齢者の社会参加を促すことと、「楽しさ」「やりがい」「生きがい」を感じて頂けるような環境の整備が重要であると判断し、具体的な事業へとつなげられた模様である。今後の少子高齢化の進行を考えた際、ボランティア活動のような地域の中での助け合いへのニーズが、ますます高まることが十分予想される。現在、活躍しているメンバーの方々がより活発に参加できる環境を整えることが、これからの地域社会における課題だ。（数値等は、波田地区社会福祉協議会の資料によるもの）

(3)地区内商工業の衰退

波田地区内では、国道158号線やサラダ街道沿いを中心に古くからの個人店舗が存在しているが、近隣市村の大型商業施設への買物客の流出や後継者不足から、廃業が進んでいる。また、工業においても操業の維持に腐心している状況であり、商工業ともに低迷が続いている。その一方で、波田地区は岐阜県高山市・奈川高原・上高地・松本市の間に位置することから、国道158号線を多くの観光客が通行するが、昔から地区間の通過点にとどまっている現状である。この状況下において波田商工会としては、地区内出張物販イベント「よなよな街角イベント」の開催、地区内を散策できるようなウォーキングコースの設定、新規観光マップの作成、その他新規イベントの企画などに取り組まれているが、様々な形で地区内の産業や魅力ある地域資源をPRすることが今後も必要となる。

(4)地区内のつながりの希薄化

前節において活発な地域活動に関して述べたが、地域のために熱心に活動していても、それが一般にあまり認知されていない部分がある。また、町会単位でも「住民同士の交流やつながりの機会が少なくなった」「若年世代との関わりが薄い」「地域のことに対して無関心である」という声も上がっている。これは波田地区だけに限られたものではないが、地域づくりを実践していく上で大きな課題でもある。逆説的に言えば、松本市と合併して行財政の仕組みが一変した後も、地区住民の日常生活面においては「大きく困ることがなかった」ということの証明だと言える。

以上を総合すると「地域のつながりが少なくなり、人の出入りの循環が成立しなくなる中、新たなつながりが求められてきている」ことが、全体的な課題であると言える。超少子高齢化への流れは国家的な現象であるが、これは戦後の高度経済成長や医療技術の進歩などに由来するものであり、その意味においては、豊かさを象徴するものだと言えるのではないか。ただし、その中で生じてきているのが、(1)から(4)までに代表されるような具体的課題である。

3．本研究の目的設定

3－1．本研究におけるキーワードの設定―1章と2章からの考察を踏まえて―

超少子高齢化や人口減少を根本から修正するのは不可能と言っても過言ではない。しかし、社会の変化を見据えての対策は可能である。松本市としては前述の通り、「人と社会の健康づくり」「市民1人1人の健康と社会環境の健康」をその対策としている。また、日本政府の「生涯現役」「健康長寿」をキーワードにした超少子高齢化社会への対応も「予防・進行管理による健康づくり」「健康寿命の延伸」を前提としている。

WHOによれば、「健康」の定義とは「身体的・精神的・社会的に最適な状態であり、単に病気あるいは病弱でないことではない」とのことである。松本市としてはこのことから、身体的な健康、精神的な健康だけではなく、市民を取り巻く社会的な環境も健康でなければ、最適な状態にはならないとの見解を示し「人と社会の健康づくり」という目標設定に至った模様である。しかし、健康を担保するものは何だろうか。1年目の活動の中で様々な文献や講演などから情報を収集した結果、1つの解答としてたどり着いたのが「ソーシャルキャピタル」「人のつながり」である。人と人との交流や触れ合いによって、自己肯定感・幸福感などポジティブな心情が生まれ、健康増進にも作用する可能性があると言われている。

また論点は変わるが、2章で記述したように、波田地区の総合的な課題は「地域のつながりが少なくなり、人の出入りの循環が成立しなくなる中、新たなつながりが求められてきている」ことである。稲葉陽二は自身の著書の中で「かつての日本社会は地縁社会であり社縁社会であったが、現代ではそれが無縁社会に変化した」という旨を述べている。農業を主体とした地域単位でのつながりや、コミュニケーションを重視した会社内でのつながりが存在していたから、日本社会は発展し続けていたのかもしれない。それはあくまで可能性の話ではあるが、「つながりが無ければ関心を持たれない」「関心を持たれなければ人は集まらない」「人が集まらなければ既存の営みが維持できない」「維持継続が目的になれば新たな営みが生まれない」「新たな営みがなければ新たなつながりが生まれない」ものであると考察すれば、社会の衰退は必然的なものだと言える。

人が循環することで社会が循環し、発展すると仮定するならば、人の出入りの循環の仕組みをつくることが「社会の健康づくり」となる可能性がある。そして、そのきっかけとなり得るのが「ソーシャルキャピタル」であり「人のつながり」なのだと言える。したがって、ソーシャルキャピタルやつながりをキーワードに設定した研究活動を行うことで、「人と社会の健康づくり」という観点から、課題解決へ向けたアプローチが可能となるのではないか。次節にて、関連する研究について記述する。

3−2.「ソーシャルキャピタル」と「つながり」に関する諸研究

「ソーシャルキャピタル」の定義には諸説あるが、基本的には「信頼」「互酬性の規範」「ネットワーク(絆)」を指す概念であり、人々の間の協調的な行動を促すものとされている。また、日本語では「社会関係資本」という言葉で表現される。このソーシャルキャピタルが効果を発揮した例として、稲葉陽二もイチロー・カワチもそれぞれの著書の中で、2011年の東日本大震災を挙げている。未曽有の大災害の最中にありながら人々がお互いを助け合いながら整然とした行動をとったことは、世界中から称賛され、日本人の持つソーシャルキャピタルの高さを表すものであった。稲葉は、ソーシャルキャピタルは日常生活のあらゆる面において影響を及ぼすものであり、その分野としては「企業を中心とした経済活動」「地域社会の安定」「国民の福祉・健康」「教育」「政府の効率」の5つを挙げている。これらの内「国民の福祉・健康」に関して最も活発に研究が行われているようである。

前述のイチロー・カワチは著書の中で、人間関係と健康の因果関係を以下の3点に整理している。

①人とのつながりがその人の行動を決める
→人とのつながりによって、知らず知らずのうちに自分の行動が決められることがあり、その結果、健康に影響する。
②人と交わるだけで健康になる
→人には「人と交わること」で保たれる体の能力や機能があり、人と関わることで健康でいられる。
③つながりから生まれる支援の力がある
→人とのつながりから生まれる様々な支援(ソーシャルサポート)が健康に影響を与える。

したがって、人と人とのつながりは、本人が意識していないところまでも影響を受けている可能性があると言え、肥満・喫煙・飲酒・うつ・幸せの感じ方においてもつながりの影響が認められていると述べている。また、地域や人のつながりや信頼感をもとにして、結束力や絆を高めていければ、自然災害や貧困などの不利な状況にも関わらず、住民の安全と健康を保てるとも述べている。

同じく、「つながり」が健康に作用するという旨を、石川喜樹が著書の中で論じている。つながりを持つことが幸福感にも結び付き、心身の健康が得られるとしている。それに加え「笑顔」であることも健康に作用するという研究結果を提示しており、「つながり」により分泌されるホルモンに関しても紹介している。このホルモンは「オキシトシン」と呼ばれるものであり、人の感情をポジティブに傾きやすくする効果があるとのことである。このホルモンの分泌が精神的ストレスを緩和させ、健康被害を最小限に抑える効果があるとしている。その他、様々な研究事例を紹介しながら、つながりと健康の相関関係について記述している。

また山根宏文らが、長野県松川村における村民の長寿に関して調査を行っている。その主な要因としては「高得点の幸福度」「活発な地域コミュニティ活動」「村内に立地する様々な健康づくり活動拠点の多さ」「高い運動収監者の割合」「低い単独世帯の割合」「暮らしの中の笑顔」の6つが挙げ

られていた。その内「高得点の幸福度」の主な要因を以下にまとめる。

①血縁者との同居率の高さ、3世代同居の割合の高さ。
②定期的な通院率、健康状態が良いと思う人の割合、健康のための心がけを実践している人の割合の高さ。
③健康のため食事に気をつけている人、自宅や自宅周辺で取れたものを料理に活用している人、好き嫌いのない人の多さ。
④高くない生活水準の中でも、経済的に不安を感じている人の割合が少ないこと。
⑤趣味の行動者率の高さ。新たな趣味・活動への意欲。
⑥地域の人、友人など家族以外の人との交流率の高さ。
⑦地域への愛着度の高さ。地域行事への参加率。
⑧生活に不安を感じる人の少なさ。血縁者と相談できる人の多さ。
⑨家庭菜園規模を含めた農作業従事者の多さ。自然や農のある暮らしから、運動効果、食事への意識、景観の美しさによる幸福感などが得られる。

様々な要素が見られるが、これらの調査結果から「家族・友人・地域との関わりの大きさ」が長寿で幸福な生活の一因となっていることが分かる。「ソーシャルキャピタル」や「つながり」と健康への効果を明らかにした、研究事例の1つであると言えるのではないか。

さらに、イギリス元労働党の議員が立ち上げた「孤独委員会」の調査では「孤独は1日たばこを15本吸うのと同じくらい、健康に害を与える」「孤独が人の肉体的、精神的健康を損なう」「900万人以上の人々が常に、もしくはしばしば孤独を感じており、その3分の2が生きづらさを訴えている」ことなどを指摘している。2018年1月にはイギリス政府において「孤独担当大臣」というポストが新設され、様々な孤独対策を実施している模様である。

以上が、「ソーシャルキャピタル」「つながり」と個人の健康との相関関係についての研究事例であるが、社会経済活動との相関関係に関する研究に関しても記述する。稲葉陽二の著書において「信頼の高い社会であるほど生産性が高く、経済成長率も高い（信頼が協調的行動を促すため）」「ソーシャルキャピタルが豊かな地域であるほど、犯罪と暴力にさらされるリスクが小さく、地域社会が安定する」「子供の学業成績や地域への参加率の上昇」「中途退学や不登校率の低下」「政府の効率、市民活動、住民自治へ影響をもたらす」などの研究結果が紹介されている。

また、長野県須坂市における調査研究から以下の3つの仮説を実証している。

①コミュニティが結束していれば、金銭、病後の介護・移動などの社会的支援の提供が容易である。
②コミュニティが結束していれば、健康上の規範が強化される。孤立していると喫煙・飲酒・過食などに陥りやすい。
③コミュニティが結束していれば、質の高い医療サービスを確保しやすい。

高いソーシャルキャピタルとつながりがあることで、須坂市では様々なまちづくり事業や住民運動が盛んに起こっている。それぞれの事業・活動にはリーダーとなるキーパーソンが存在していたが、地域住民の持つ強固なネットワーク（ソーシャルキャピタル、つながり）があったからこそ、具体的な実践を行うことができたと分析している。

3−3．本研究の最終目的

「ソーシャルキャピタル（人のつながり等）の構築が、心身の健康に作用する」ことを中心に、様々な研究者がソーシャルキャピタル（つながり）の効果を論じていることは、前節で述べた通りである。地区内外にわたるソーシャルキャピタルの構築を進めることができれば、それが住民の心身の健康だけでなく、地域福祉や地域産業、ボランティアなどの地域活動全般の活性化にも結び付く可能性がある。それが前々節において述べた『「人と社会の健康づくり」という観点からの課題解決へ向けたアプローチ』における仮説提唱である。

しかしながら、それは仮説としては安易なものであり、研究上の独創性は乏しい。よって、さらに深い仮説を立て、それを検証することを3年間における本研究の最終目的としたい。「有効性のあるソーシャルキャピタルやつながりの在り方、その内実」を探求するために、以下の2つの観点を挙げる。

①世代間交流　　②地区外交流

まず第1の観点「世代間交流」においては、高齢者世代と子供・学生などの若年世代の交流の場を意図的につくりあげることで、既存のコミュニティの活性化や新たなコミュニティの創出を目指していく。異なる世代での交流の機会を持つことにより、地域住民の心身の健康、充実感などをもたらすとともに、様々な地域活動がより活発になるのではないか。上野山祐士と南勉の研究では、高齢者と子供や学生などの若年世代とのつながりが、両者に良い影響を与え合うということを論じている。前者は、認知症カフェに大学生が参加したことによる効果と、認知症カフェにおける世代間交流の意義について述べており、後者は高齢者福祉と児童福祉の2つの領域を組み合わせる意義を述べつつ、そのシステムづくりを提言している。また実践事例は全国に存在し、特別養護老人ホームと子育てサロンの連携、地域の高齢者サロンでの子供たちとの交流企画など様々な形で取り組まれている。交流イベントという形では、飯田市の「華齢なる音楽祭」において、地元の高齢者と高校生が協働して企画運営を行っており、平成29年には750人以上の観客を集めていたようである。また河合成文らの報告書では、地域の様々な団体の協働企画による水鉄砲を用いた対戦イベントを行ったことで、家族内の交流、世代を超えた交流、地域への理解を広めるなどの効果があったことが述べられている。

そして、第2の観点である「地区外交流」においては、新しいつながり構築によって地区外に向けて波田地区をPRする機会としての活用を目指していく。大下茂の「集客まちづくり」に関する著書によれば、港町・宿場町・門前町など、かつての日本で栄えたまちは人の往来が活発で、地域の外から人や物、情報などを集めていたまちであると述べられている。地域の住民だけでは限界があるため、外から人を呼び込んで交流人口を増やしていくことが地域経済の活性化につながるとのことである。「外から人を呼び込んで交流人口を増やす」ということは即ち、「地区外交流」そのものではないか。この著書の中で他に「地域おこしのためには、自地域を世間に売り込むことが重要」とも述べられており、売り込みの手法もいくつか紹介されている。例としては「自地域でのイベント開催」「既存の外部マーケットへの出店」「外部ネットワークの活用」などが挙げられているが、いずれも人々とつながることを前提にしており、「自地域でのイベント主催」は地域内の住民と外部の人々との双方とつながることも可能である。

以上の①②を踏まえた上で、実践活動のテーマをこの2点に設定する。

(1)地区住民同士の交流の機会づくりと、地域の支えあい活動の活性化。
(2)地区外との交流の機会づくりと、それによる波田地区の魅力発信。

3年間の任期の中でこの2つのテーマに取り組む。そのプロセスの中で「地区内外にわたるソーシャルキャピタルの構築を進めることが、住民の心身の健康だけでなく、地域福祉や地域産業、ボランティアなどの地域活動全般の活性化にも結び付くのではないか。」そして「有効とされるソーシャルキャピタルやつながりの在り方、その内実は何か。その解答は世代間交流や地区外交流に求められるのではないか。」という仮説を検証し、松本市及び波田地区の地域づくりの一助とすることを本研究の最終目的と据えて、活動を行う。

4. 実践内容と得られた知見

4－1. 地区住民同士の交流の機会づくりと、地域の支えあい活動の活性化を目指して

(1)地区事業・行事への参加、協力

2章で記述したように、本年度は波田地区を知り、学ぶことを目的に、様々な事業・行事・会議等に参加させて頂くことを活動の中心としていた。ここでは、実践テーマに照らし合わせた上で特徴的なものを記述する。なお、ここまでに記述したものと内容が重複する場合は、割愛する。

①波田地区まちづくりモデル町会推進事業

2章において触れたが、波田地区独自の地域づくり事業として本年度から「まちづくりモデル町会推進事業」を展開した。地区全体ではなく、町会単位での地域活動への取り組みを推進するものであり、年度をまたぎながら数年をかけて地区全体へ広げていくという戦略である。初回である本年度は3区町会、7区町会、26区町会の3つの町会

に協力して頂いた。具体的な実践内容は以下の2つである。

・松本市立病院とスポーツジムインストラクターと連携した「介護予防講座」
・地域のつながりをテーマにした「町会ワークショップ」

介護予防講座では、内科の医師からサクセスフルエイジング（健やかに幸福に老いを迎えていくこと）の理論と実践についての講演、リハビリ科の療法士からの介護予防に関する理論や体操講座、スポーツジムインストラクターによる健康増進のための体操の実践をひとまとめにして取り組んだ。また、町会ワークショップでは、町会役員を中心に、各町会の住民でいくつかのグループに分かれて「地域のつながり」「困りごと」について話し合いを行い、それを共有した。筆者としては両方の事業に出席し、特に町会ワークショップの際は単一グループ内の進行役・まとめ役に近い役割を担当した。

事業の成果としては、介護予防講座の方では理論的な部分を学びつつ「体操」という実践の段階で参加者の中に笑顔が生まれ、意義深いものとなった。また町会ワークショップにおいては、町会により細かな違いはあるものの、全体的な課題として「昔は頻繁にあった地域のつながりが少なくなってきた」というものが挙げられた。その解決策として「人が集まる場をつくる」「積極的な仲間づくり」「空き家を認知症カフェに活用する」などの意見が挙げられた。

②波田公民館・波田地区福祉ひろばにおける事業協力（和太鼓、絵本の読み聞かせ）

様々な地区の事業に関わる中で、筆者個人の特技である和太鼓の体験と絵本読み聞かせを披露する機会を得た。波田公民館事業における「波田生き活き健康大学」と、波田地区福祉ひろば事業における「おしゃべりサロン」「出前ふれあい健康教室」において、地区の住民を対象に実施した。双方ともに視覚・聴覚など五感を刺激するものであり、高齢者の皆さんにも楽しむことのできる内容を意識して取り組んだ。和太鼓の体験並びに、絵本の絵を見せながらの読み聞かせは今までにない企画であったため、地区の住民にとっては新しい体験であった。それぞれの実践現場において、多くの笑顔を見ることができた。

和太鼓体験の様子

絵本読み聞かせの様子

公民館や福祉ひろばの事業に参加する方は、地元の高齢者が多い。1年間の中で様々な事業に参加させて頂いたが、子供や若い親子を対象にした事業はあるものの、平日昼間の事業には若年世代の参加者はなく、筆者のみという状況が多かった。主観的な意見にはなるが、筆者のような若年世代が高齢者中心のコミュニティの中に入ることで、歓迎を受け積極的に声をかけられた。そして様々な企画を持ち込むことでさらに笑顔が生まれ、事業内容に若干の広がりが生まれた。

③3区町会出前ふれあい健康教室への参加

前述のように、福祉ひろばの事業として各町会における「出前ふれあい健康教室」を開催している。簡単に説明すると、各町会の公民館に住民が集まり、歌やゲーム、体操、茶話会を楽しむといった内容である。1年をかけて殆どの町会をまわる事業であり、各町会にとっては年に1度の催しとなっ

ている。3区町会においても同様に年1度の開催となっているのだが、3区町会は他の町会に関しては独自の取り組みを実践している。3区町会には県立の梓川高校があり、公民館の道向かいに立地しているという関係性から、梓川高校で福祉や保育に関して学ぶ「福祉コミュニケーションコース」に在籍する高校生と教員が参加している。本年度は高校生が20人ほどと教員2人が参加し、3区町会の住民（高齢者中心）と一緒に活動を行った。高校生が高齢者にお茶を配り、手遊びを用いたゲームでは、高校生と高齢者が2人組となって参加し、その後のニュースポーツ大会では高校生と高齢者が10人ずつ程度のチームを組んで、成績を競った。

異なる世代が交わり、同じ目標を持ちながらゲームに参加することで、感情を共有することができる。成功すればハイタッチをして喜んだり、失敗すれば声を掛け合ったりなど自然に交流ができ、笑顔につながっていた。地域の住民は終始嬉しそうな顔を浮かべており、「是非またお越し頂きたい」との言葉も聞かれた。また、高校の教員からは「学内とは異なる集団の中に身を置くことで生徒の成長にも結び付いている。普段は内気な生徒が、この場では積極性を発揮した。」との意見を聞いた。梓川高校としても、今後も地域との関わりを続けていきたいという意向であり、2019年2月開催の波田地区地域づくりシンポジウムにも教員と生徒の皆さんが参加している。波田地区ならではの世代間交流の実践事例の1つだと言える。

④松本大学「社会活動」との連携

松本大学のカリキュラムの中に「社会活動」という授業が存在する。これは学生が様々な地域活動やボランティアへの参加を通して地域に関心を持ち、学習を深めることを目的としたものであり、波田地区福祉ひろばの事業へ学生が参加できないかと、担当教員と筆者が福祉ひろばへ相談したことから始まったものである。その後2018年7月以降、1人の学生が合計3回「おしゃべりサロン」という事業へ参加した。

この「おしゃべりサロン」という事業は金曜日の午前中に開催されるもので、女性を中心に波田地区の高齢者が集まり、事業名の通り会話、歌、ゲームなどを楽しむ催しである。学生の人数、参加回数ともに多くはないが、「おしゃべりサロン」参加者は嬉しそうに同じ時間を過ごしていた。特に学生が男性だったということもあってか、参加者との会話が弾み、盛り上がっていた。学生には3回の中で特別な企画などやって頂いた訳ではないが、同じ空間にいるだけで参加者にとっては嬉しいことであるようで、学生が参加する予定を伝えると、期待する声が多く上がっていた。こちらに関しても主観的な意見ではあるが、世代間交流の１つの実践事例として数えることができると言える。

⑤夫婦堤音楽祭・ライトアップHATA

「夫婦堤音楽祭」は毎年4月に開催されるイベントであり、前述のボランティア団体「山毛欅の会」が主催するイベントである。波田地区の桜の名所「夫婦堤」にて行われ、国際的な評価の高い「波田少年少女合唱団」をはじめ小学生から大学生までの音楽団体が出演している。また「ライトアップHATA」もイベントの名称であり、ボランティアで組織した実行委員会が企画運営しているものである。松本市役所波田支所の駐車場を利用してのイルミネーションであり、12月から1月にかけて約1か月、夕方から夜間にかけて通行人を楽しませている。その点灯式では、様々な団体がステージ発表を行い、地元の小学生も出演している。

双方に共通している点は、既に10年以上にわたり開催していること、ボランティアにより運営されていること、小学生を中心に若年世代がステージに上がること、ステージ出演だけでなく準備段階でも多くの学生が関わっていること、家族連れを中心に多くの方が集まること、である。地区住民の交流の場であり、子供がステージに出演し、地域の大人がそれを楽しむことから世代間交流の機会にもなっている。(3)にて、新規イベント事業に関して記述するが、その参考としたい。

⑥よなよな街角イベント

波田商工会で開催しているイベントであり、10年以上継続している。商店街のPRと買い物弱者への対応を目的に、毎月1回、波田地区内の公民館、グラウンド、公共施設などお借りしながら地元商店の商品など販売する催しである。購入者には割引券や福引券を渡し、子供対象のダーツゲーム、じゃんけんゲームなどにも取り組んでいる。地元の方対象のイベントであり、親子連れも来客している。目的はもちろん物販であるのだが、地域の大人と来客する子供たちとの世代間交流という要素も含まれている。②で記述したように、この「よ

なよな街角イベント」においても和太鼓の体験コーナーを設け、子供へのアプローチを図った。太鼓の音を鳴らすことで、道行く人の注目を集めることができ、何より太鼓を体験した子供は楽しんでいた。この物販イベントには固定客がついており、毎回楽しみに来場している。子供を含めた地域の住民と触れ合えることで、商店街の方々にとって励みとなっている。

商工会事務局としても、このイベントと掛け合わせながら、地域に子供が出てきて大人と触れ合う機会がつくれると良いと考えている。地域の中で子供が遊ぶことが少なくなった印象があるようで、地域の中に人が集まり、子供とお年寄りを含めた大人が交流する「世代間交流」の場を提供し、尚且つそれが商店街の利益につなげられるような事業ができるのが理想としている。

⑦その他

「世代間交流」という観点から、その他の事例を紹介する。前述の「おしゃべりサロン」では、大学生の参加の他に未就園児の体操教室「竹の子教室」と、「ふれあい健康教室」では「みつば保育園」の園児とそれぞれ交流会を開催した。小さな子供たちと同じ空間にいて、歌の発表を聞いて、プレゼントを手渡され、抱っこをして、と様々な形で触れ合いの時間をもったが、やはり交流できることが嬉しく楽しくある模様で、通常よりも笑顔が多く見られた。参加者も通常より多く、人気がある企画であると言える。

(2)医療福祉施設へのボランティア

2章で記述したように、波田地区には様々な公共施設が集中しているが、その中には医療福祉関係の施設も多く含まれている。今後の少子高齢化社会や地域づくりを考えたときに、医療・福祉という領域を抜きには語れないため、サービスの提供現場に関して少しでも把握したいと思い、また個人的関心もあったため、可能な範囲で各施設のボランティアに協力した。高齢者デイサービスセンター、児童館、福祉型障害児入所施設、公立病院の4種類の施設である。この内のいくつかは地域とのつながりを求めていることが、現場のスタッフへのヒアリング調査から分かった。

デイサービスセンターでは、定期的に地域のボランティアを招いたり、学生の資格実習や職場体験を受け入れたり、地元の保育園児との交流会が企画されたりと、様々な形で地域との交流の場が存在する。特に学生や子供のような若年世代が来所される時は、利用者それぞれ喜ぶ姿が見られるということである。実際に保育園児との交流会に参加したが、歌やダンスを聞いて一緒にゲームに参加することで、利用者の皆さんに笑顔があふれていた。高齢者側としては、園児たちの元気な姿を見ることで嬉しさや安らぎを感じただろうと推測する。

児童館においても、様々な形で利用児童と地域の方々が触れ合いの場を持っている。また「子ども運営委員会」が利用児童を中心に組織され、館内で様々な活動を実施している。波田地区にある2ヶ所の児童館の内「波田児童センター」においては利用児童数が約160名を数え、ほぼ毎日大勢の児童が来所し、賑やかな時間を過ごしている。児童館と地域との関わりは、5年ほど前から徐々に増加してきているが、児童館側としては、今後も地域と施設と児童とがつながる機会を広げていければと考えている。

障害児入所施設では、様々なハンディキャップを持つ児童が、それぞれ共同生活を営みながら養護学校へ登校し、日々を過ごしている。支援現場のスタッフによると、利用者の方々それぞれが、いずれは学校を卒業し社会へ出ていかなくてはならない。そのために社会性や協調性を養うことも目的としながら、地域の行事・イベントには積極的に参加しているとのことである。それ故、様々な形で利用者と地域がつながる機会ができれば良いと話していた。

公立病院では、団体や個人単位で院内ボランティアが活動している。内容としては草木の手入れ、入院患者の話し相手などであり、以前は音楽ボランティアも活動していた。(1)に記したように、特技の絵本読み聞かせを患者の皆さんに披露したが、声や笑顔で喜ぶ方もいれば、最後まで絵本を注視する方もいて、日頃は見せない姿を見せていた模様である。この読み聞かせが何らかの感覚的な刺激に結び付いたのではないか。担当MSWからは今後何でも相談・提案して頂きたい、との言葉が聞かれた。

(3)軽トラ市(仮称)の企画立案

2018年の秋、波田まちづくり協議会の役員から、新しく拡張工事が進む波田支所の駐車場を活用してイベントを企画してはどうか、という提案があっ

た。具体的には、日本全国で開催されている「軽トラ市」の提案である。この企画提案の目的は以下の3点である。

①国道158号線を通る観光客に対する波田地区の特産品販売とPR。
②波田地区住民同士の交流の機会づくり。
③波田まちづくり協議会における独自収益事業の新規展開。

この提案をもとに、インターンと地域づくりセンター長、提案者の3者で協議をしながら企画立案を行い、波田まちづくり協議会の役員会に改めて提案することとなった。既に10年以上に及び「軽ットラ市」を実践しているJA松本ハイランド様からも事例調査を行い、波田地区ならではのイベントにするためにはどのようなものが良いのか検討を重ねた。簡潔に要点をまとめると以下のようになる。

・会場は波田支所の駐車場。
・波田商工会とJA波田支所協賛のもと、地元商店、農家の有志から出品者を募集。軽トラ市も兼ねた販売ブースを設置。商工会や農家以外にも出品希望者いれば、同様に依頼する。
・集客と交流のため屋外ステージ発表を企画。出演者は小学生～大学生の若年世代を中心に、地域の皆さんへ出演依頼を行う。
・公民館の休館日でもある各月第1または第3日曜日に開催。時間は10：00～13：00くらいを想定。
・実行委員会を独自に組織し、波田まちづくり協議会から自立した運営を行う。
・販売ブース参加者より一定の出店料を頂戴し、波田まちづくり協議会の運営資金にあてる。
・イベントの名称は、今後検討。
（詳細は巻末資料を参照）

この企画が実現できたとすれば、実践テーマとも重ねながら「多様な世代が集まり、賑わう場づくり」「若者と地域の大人との交流の機会づくり」「地元の産業や地域づくりについて知る機会づくり」「段階を踏んでの観光客への本格的なアプローチ」へと展開できる可能性がある。まずは「住民同士の交流の場」であることを重視し、地区住民に認知され人の集まる企画になることを目指していきたい。

今年度は、企画立案と波田まちづくり協議会へのご提案という段階に至ることができた。ただしあくまで企画を起こしたのみであり、実際に形にできるかどうかは未知数である。来年度は試行的に1～2回実施して様子を探り、現実にどのような手法が有効なのか丁寧に検討し、再来年度の本格開催を目指す予定である。

4－2. 地区外との交流の機会づくりと、それによる波田地区の魅力発信を目指して

(1)地区事業・行事への参加、波田商工会の事業への協力

前節の(1)と同様の経緯から、ここでは実践テーマに照らし合わせて特徴的なものを紹介する。2章で記述したように、波田地区は様々な地域資源に恵まれており、観光資源・集客商品として転用できる可能性も秘めているが、現時点ではまだ広がっていない。

①水輪花火大会・波田さいさい祭

梓川地区との合同による花火大会を毎年7月に開催しており、主な会場は波田地区と梓川会場に分かれている。また、波田地区の夏祭り「さいさい祭」も兼ねている。この花火大会は松本市内では最大の規模を誇り、地区内外から老若男女を問わず、多くの方々が集まる催しとなっている。花火の他には屋台が並び、地元金融機関や諸団体によるビンゴゲーム、スイカランタンづくり、スイカの種飛ばしゲームなど行っている。また、ステージ発表のコーナーでは、子供から大人まで様々な方が出演されている。昼から夜間にかけて様々な催しがあり、大きな盛り上がりを見せる。

波田商工会事務局としては、将来的に松本市の西部ブロック（波田地区、梓川地区、安曇地区、奈川地区）の4地区を巻き込んで、人が4地区の中を往来し滞留できるような仕組みづくりを考えている。例えば、昼間は山遊びや川遊び、夜は花火のような流れで西部ブロックを楽しむようなものである。一方で波田会場においては、夜間の花火打ち上げ前後については多くの方が来場するが、比較的昼間の来客数は少ない傾向にある。そのため、何か注目を集めるような企画が必要であり、それは前述の将来構想の実現への布石にもなる。その１つのご提案として、筆者は「書道パフォーマンス」の企画を提案した。筆者の母校・県立松

本蟻ケ崎高校の書道部は松本市近隣の地区に先駆けて、書道パフォーマンスに取り組んでいる。松本市内、長野県内にとどまらず全国を巡りながらの活動を展開している。また、書道パフォーマンスの傍らで、多くの方に書道を身近に感じてもらうために、書道体験コーナーも設置している。このことから、水輪花火大会及び波田さいさい祭において「書道パフォーマンス」や「書道体験コーナー」を企画することで、波田地区内はもとより波田地区外の方々へもアプローチできるものであると同時に、様々な人がつながり交流する機会にもなり得る。

書道部の顧問へ相談した結果、2019年度の開催に関しては協力を得られることになった。今後は開催に向けて細かな連絡調整を続けていくが、書道部のみにとどまらず、より一層水輪花火大会や波田さいさい祭が盛り上がりを見せ、広域的な視点から見た地域の観光振興につなげられるようなものを企画していく。

②波田商工会ウォーキングコース検討

波田商工会の地域振興事業として現在、波田地区ウォーキングコースの設定に向けた検討を行っている。前述の通り、波田地区には魅力的な地域資源が多数存在する。かつて「信濃日光」と呼ばれた巨大寺院や城塞の遺構、古い門前町や城下町の面影が残る古い町並み、松本平を一望できる風景などがその代表的なものであるが、それらを楽しみつつ商店街に関心を持って頂けるような仕組みとしての、ウォーキングコース設定という位置づけである。筆者はこのウォーキングコースの下見などに協力した。

本年度は下見とコース内容の検討を主に取り組み、本格的な事業としては2019年度以降にスタートする予定である。コースは複数設定を検討しており、歩行距離も見られる地域資源もそれぞれ異なるが、必ず商店街を通過するようになっている。波田地区は坂道・山道が多い地区であり、運動効果も十分期待できる。地区内を運行する「波田循環バス」の利用にもつながれば、片道のみのウォーキングも可能になる。ウォーキングコースが現実のものとなれば地区の住民はもちろん、地区外の方々にもPRを行うことで波田地区に足を運ぶ可能性も生まれる。また、ウォーキングと連帯した新規イベントの企画や、昼間と夜間両方の観光マップの作成も商工会事務局は計画している。

③恋人の丘サラダマーケット

波田商工会所管の農産物直売所「恋人の丘サラダマーケット」がサラダ街道沿いに立地しており、波田産の新鮮な農産物が多数並んでいる。この付近は大変眺望が良く、前述の松本平を一望できるスポットの1つである。「恋人の丘」という名前は、かつて波田町時代に姉妹都市提携を結んでいた静岡県土肥町（現在の伊豆市）に「恋人岬」というスポットがあるため、それにあやかり名付けられたものである。

店舗が山形村との境付近に位置しているため、山形村観光を楽しんだ方が来客することも多い。基本的に通年で営業しているが、2018年度の冬季は経営面の事情から休業することになった。ただ完全な閉店状態にするのではなく、店舗でのイベントを開催。それは前述の「よなよな街角イベント」とは別形態での開催となり、佐賀県唐津市から仕入れた海産物と通常の商店街商品を販売する「大海産物フェア」の名称で2回実施した。また、販売のみではなく「昭和のおもちゃ体験コーナー」「おもちゃ・農機具修理コーナー」筆者による「和太鼓演奏・体験コーナー」を設け、地元新聞にも広告を載せることで集客増を図った。地元の方に加え、サラダ街道を通過する県外ナンバーも来客し、多様な層がイベントに参加することになった。

②で前述したウォーキングコースにも含まれている店舗であり、立地条件などから商業施設としてPRできる可能性を秘めていると考える。

④波田みはらし味の会

③で前述した「恋人の丘サラダマーケット」の隣に「味工房はた」という店舗が立地しているが、この店舗の運営を担当しているのが「波田みはらし味の会」という団体である。「味工房はた」では手打ちそばやジュース、ジャムなどの農産物加工品を販売しており、数量限定で郷土食である「氷餅」の製造販売も行っている。「波田みはらし味の会」の構成員は地元・波田地区の高齢女性が中心であり、「味工房はた」の営業、各種商品の製造販売、イベント会場などでの外部販売など行っている。そばや加工品は好評を受けており、県外の方からも問い合わせがあるほどである。長野県内や全国でのお弁当コンクールにて最優秀賞を受賞するほどの評価を受けており、波田地区内の様々な催しの中で、お弁当の受注販売も行っている。

しかし、味工房はたへの来客は減少傾向であり、

広い波田地区の中でその存在や実績など一般に知られていない部分がある。波田商工会からも依頼があり、現在氷餅を利用したスイーツを開発し、新商品として展開できるよう取り組んでいるところである。サラダマーケットと同様にウォーキングコースの中に含まれており、また独自の実績が存在するため、波田地区ならではの地域資源としての活用が期待できる。

恋人の丘
サラダマーケット（左奥）　味工房はた（右手前）

（2）中央地区「城南あさ市」と波田商工会との連携

冒頭に記述した通り、地域づくりインターンシップの4期生として着任しているが、同期の2人がそれぞれ松本市の中心市街地に配属されている。そのうちの1名からの提案を受けて進めたのが、これから述べる実践内容である。

松本市の中央地区では、地域の高齢者の「買物外出が難しくて困っている」というニーズに応えるため、「あさ市」を定期的に開催している。この「あさ市」は、松本市大手公民館前で行われる「城南あさ市」と、松本神社にて城北地区と共同開催する「ようこく市」の2種類が存在し、それぞれ月に1度のペースで実施されている。ここには四賀地区や今井地区の住民が、農産物や加工品、おやきなどを販売しており、地域の高齢者を中心に賑わう。本来の目的は地元高齢者への買物支援であるが、その地理的条件から観光客も訪れるようになっている。2種類のうち「城南あさ市」は2018年11月に1度開催したばかりであるが、次年度も開催を継続し、定着化させることを考慮した結果、波田地区の方々の協力を依頼できないかという判断となった。そして、同期のインターン生を通じて「城南あさ市」への協力依頼が行われ、波田商工会へ提案と相談を行ったという経緯である。

その後、同期のインターン生との間で連絡調整を続け、2019年の2月に波田商工会と中央地区との「城南あさ市」協力に関する打ち合わせ会を開催した。この打ち合わせ会が双方の初顔合わせにもなった訳だが、双方の現状や希望を話し合った結果、「恋人の丘サラダマーケット」の名義で、5月の第1回から参加協力することに決定した。開催時間が約1時間半という短時間にはなるが、松本市の中心市街地において、定期的に波田地区及び「恋人の丘サラダマーケット」がPRできる貴重な機会になり得る。初めての試みであるため、波田商工会としても中央地区としても試行錯誤しながらの実践にはなるが、「地区外交流」の実践事例にもなるため、波田地区配属のインターンとして、円滑な運営ができるよう今後も協力を続けていく。

（3）軽トラ市（仮称）の企画立案

前節の（3）に同じ。この実践は前章で述べた2つの観点と2つの実践テーマが重なる取り組みである。

5．2018年度の実践の総括と次年度以降の展望

インターン初年度の活動は前述の通り、波田地区のことを知り、学ぶことを主な目的としてきたため、直接地区課題の解決に結び付く具体的な実践や成果までには至らなかった。ただ、次年度以降の活動を見越しての種まきはある程度達成できた。以下に、これまでの約1年間の活動の総括と今後の展望について論述する。

5－1．【4－1.】に関して

これまでに記述したように、「地域の中でのつながりが少なくなった」という実感は町会単位でも挙げられているものであり、その解決策として挙げられたのが「人が集まる場をつくる」ことであった。そして、その鍵となるのが「世代間交流」ではないか、という仮説を立てたのは前述の通りである。そのため、子供と大人が交わる機会には、積極的に参加させて頂いた。様々な事例を見た上で言えるのは「世代を超えてつながることが高齢者の笑顔や元気に結びつく」ということである。アンケート調査などを実施していないので客観的な分析などは難しいが、その交流の現場にいた時の実感からすれば、子供と触れ合うことで声や表

情の変わる高齢者の姿を多く見たため、何らかの効果はあったものと推測できる。

一方で、地域とのつながりを求めている施設があることは、4章にて紹介した通りである。このニーズを今後の少子高齢化を迎える中での地域づくりに活用できる可能性がある。また、つながることは、若い世代にとっての「社会経験の場」にもなり得る。具体的な形態は模索しているところであるが、意図的に「世代間交流」ができるような企画を考案していくことが、今後の課題である。

ただ1点だけ言えるのは、「軽トラ市」が実現した場合、その交流の場になり得るということである。ステージ企画をきっかけとして様々な世代が同じ場所に集まり、出店をする方にとっても、多少なりとも売り上げの機会となる可能性がある。前述の通り、2019年度は試験的実施という位置づけで企画する予定であるため、どのような結果を迎えるかは未知数であるが、2020年度に本格実施を検討するということを踏まえた上で、丁寧に準備を行っていきたい。

以上を総合し、今後の展望として以下の2点を挙げる。

- 軽トラ市の企画準備を、地域の方々と協力しながら進めていくこと。
- 継続的にニーズ調査を行いながら、波田地区ならではの地域づくりに結び付く交流企画を考案すること。

5－2.【4－2.】に関して

波田地区では、波田商工会をはじめ様々な団体が、地域を盛り上げるために精力的な活動を行っている。波田地区内に魅力的な地域資源が存在することは何度も記述している通りだが、それをより多くの方にPRするために「地区外交流」が必要であるとの仮説を提唱した。そのきっかけとなるものを教えられた1年間であった。

地域振興の最大の目的は地域内を往来し、消費行動をとる人を増やすことであるが、そのために具体的な仕掛けが必要となる。その例として挙げられたものが行事やイベントの開催、ウォーキングコースの設定、新商品開発であり、それこそが地区外との「交流」「つながり」となり得る。様々な企画やモノを媒介にして地区外の方を呼び込み交流する機会をつくることで、地区内の様々な地域資源を知る機会を創出する。そこが全ての発着点であり、限られた任期の中で可能なのは、その「媒介のための媒介」をコーディネートすることである。それが4章で紹介した「書道パフォーマンス」や「他地区事業への参加」そして「軽トラ市企画」などである。綿密な連絡調整を欠かさず、着実に実践に移していきたい。

以上を総合し、今後の展望として以下の３点を挙げる。

- 軽トラ市の企画準備を、地域の方々と協力しながら進めていくこと。
- 中央地区の「城南あさ市」へのスムーズな参加ができるよう、綿密な準備を行うこと。
- 広く情報収集をしながら、既存の行事や事業をさらに活性化する企画を考案すること。

5－3. おわりに

これまで論述してきたように、「世代間交流」「地区外交流」の2つの観点からの実践テーマに取り組むことで、「人と社会の健康づくりによる総合的なまちづくりの基盤」につながる研究活動を行うことを、今後3年間の目標としたい。2018年度は、様々な人と出会い、様々な事業・行事に触れたことで、波田地区ならではの魅力を学び、個人的な見識を深めることのできた貴重な1年間であった。感謝すると同時に、次年度以降も精力的に活動を展開していく。

参考文献・巻末資料

経済産業省ヘルスケア産業課　九州ヘルスケア産業推進協議会資料「超高齢社会への対応―生涯現役社会の構築を目指して―」

松本市第8回世界健康首都会議からの資料

松本市ホームページ

「未来の年表２　人口減少日本であなたに起こること」河合雅司

波田町合併記念誌「大いなる波田」

波田地区文化財マップ～波田の歴史を見る～

波田地区地域学習テキスト

波田地区社会福祉協議会からの資料

「長寿のヒミツ―松川村はなぜ日本一なのか―」山根宏文

「ソーシャルキャピタル入門　孤立から絆へ」稲葉陽二

「命の格差は止められるか　ハーバード日本人教授の、世界が注目する授業」イチロー・カワチ

「友だちの数で寿命はきまる　人との「つながり」が最高の健康法」石川喜樹

BBC NEWSJAPAN 英政府、「孤独担当大臣」新設　殺害された議員の仕事継続

ハフポスト日本版 「孤独担当大臣」とは？ 新設されたイギリス、「孤独」の国家損失は年間4.9兆円

「認知症カフェにおける世代間交流―地域インターンシップ・プログラムでの実践を事例に―」上野山裕士

「高齢者介護と児童保育の組み合わせ～老年と子供との精神的絆の視点から～」南勉

「奈良県橿原市にて地域コミュニティーの強化と活性化を目的とした多世代交流イベントについての報告　地域力向上を目指して」河合成文、中川勝利、中川大樹、土橋孝政、小林千恵子

「行ってみたい！と思わせる「集客まちづくり」の技術」大下茂

軽トラ市（仮称）の企画書①

軽トラ市（仮称）の企画について

１．趣旨

住民同士のつながりを深め、波田地区の特産・魅力のＰＲを行う機会をつくるために、波田まちづくり協議会の新規独自事業の１案として、こちらの企画を提案するものです。

今年度の町会ワークショップでは「地域のつながりが少なくなった」という意見が多く聞かれました。それを踏まえ、波田まちづくり協議会として、従来とは異なる形で「つながりの場」をつくることで、波田まちづくり協議会の事業理解に結び付くと思われます。

２．目的

（1）　波田地区住民の交流の機会づくり（出店者と消費者、ステージ出演者と観覧者など）
（2）　国道 158 号を通る観光客への波田地区の特産品販売およびＰＲ
（3）　波田まちづくり協議会における独自収益事業の新規展開

３．実施主体

（1）　主催　　波田まちづくり協議会
（2）　運営主体　　軽トラ市実行委員会（仮称）

４．実施方法（案）

（1）　会場　　松本市役所波田支所駐車場（旧波田公民館跡地）
（2）　実施日　　各月の第１または第３日曜日（通年）。
（3）　開催時間　　午前 10 時から午後１時。
（4）　開催内容　　軽トラ市及びステージ企画。
（5）　出店条件　　波田地区の在住者。または、波田まちづくり協議会に加盟する団体の構成員であること。
（6）　出店料　　出店料（金額未定）及び運営費（売上額の一定割合）。
（7）　当日管理者　　波田まちづくり協議会から１名。
（8）　その他
　ア　出店方法　　軽トラ（車両）や出品物は、出店者各自で用意。
　イ　協賛　　JA 及び波田商工会（共同企画）・・・出品物は農産物に限らない。
　ウ　ステージ企画　　集客のためステージ企画を実施する。
　エ　その他　　地域ポイントの還元を検討する。

５．2019 年度実施方法

（1）本格実施に向けて

上記本格実施に向け、運営組織、実施方法に係る課題を整理・分析し、目的に沿ったより良い自立した運営ができるように、2019 年度は下記の方法で試行実施をいたします。

（2）実施方法

開催期間・・・2019 年度内に 1～2 回。第１または第３日曜日に開催する。
その他は「４．実施方法（案）」でお示ししたものと同様。

軽トラ市（仮称）の企画書②

（3）実行委員会の立ち上げ

ア：時期　　６月頃までを目途に組織化。
イ：構成団体　　波田商工会、JA 波田支所の２団体にお声がけする。
　　波田まちづくり協議会と合わせて３団体で構成したい。
ウ：役割分担　　販売ブースとステージ企画それぞれに担当者が必要。
　　→各関係団体との連絡調整など行う。
　　実行委員長は、波田まちづくり協議会から選出。
　　→全体のマネジメントを行う。当日管理者も兼任する。
エ：開会時期　　必要に応じて。
　　終了後は「成果確認」「課題分析」「本格実施に向けた検討」のために開会（12 月末までに）。

６．ブース企画等及び課題

（1）ステージ企画

ア：事業展開
（ア）出演者・・・小学生～大学生の若年層を中心に出演を依頼。
　　地域の大人も出演可能とする。
（イ）会場・・・・屋外に設定。
（ウ）出演料・・・ボランティアでの出演。
（エ）その他
（ａ）特に小学生など、子供の出演者がいれば、家族での来場が十分予想される。まずは地域の方々の集いと賑わいの場を作り上げることが重要。
（ｂ）屋外ステージの存在は観光客の目に留まるのではないか。販売ブースとの距離も近くなれば、消費行動に繋がりやすい。

イ：課題
（ア）屋外ステージのリスク・・・騒音、天候、ステージ設営に係る労力。
（イ）学生の団体～出演依頼をするにあたり、学校関係への連絡調整が必要。
（ウ）ボランティアでの出演の可否は、交渉次第。
（エ）出演者それぞれに控室や専用駐車場が必要。どこか場所を用意できないか。
（オ）夫婦堤音楽祭など、子供が出演するイベントにおける事例を参考にしたい。

（2）販売ブース

ア：事業展開
（ア）波田商工会の「よなよな街角イベント」
（イ）「きろろ」出品者の有志による軽トラ使用の販売ブースを設置
（ウ）波田みはらし味の会や公民館サークル等、希望する団体あれば、同様に出店を依頼する（手工芸品の販売なども可能とする）。
（エ）その他
（ａ）ステージ企画により人が集まれば、そのまま消費行動に繋がりやすい。
（ｂ）工夫次第で、国道 158 号線の通行者(観光客)も参加する可能性がある。

軽トラ市（仮称）の企画書③

イ：課題

（ア）観光客にも来場して頂くには、イベントに関心を持って頂く工夫が不可欠（158 号線沿いに旗や看板の設置など）。しかし、実際にどれだけ来場者が増えるかは未知数。相応の労力も必要となる。

（3）その他に考えられる課題

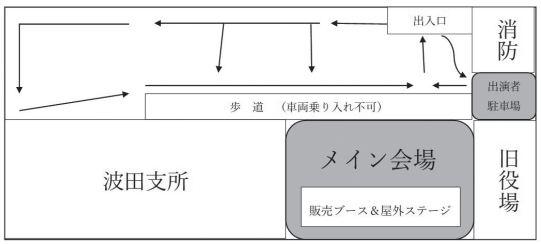
ア　波田支所駐車場利用の可否。また、利用可能であったとしても、利用料の支払いが発生すること。

イ　当日管理者（波田まちづくり協議会）の人件費が発生すること。

ウ　実行委員会の組織と運営。まちづくり協議会としての関わり方を検討する必要がある（組織体制の再編との兼ね合い）。

エ　毎月開催にした場合、ステージ企画に不安あり。一定数の出演者を毎回お願いできるだろうか。

オ　企画・準備から実施に至るまでのスケジュール。

カ　会場設営、交通誘導等のスタッフが必要。

7．会場図（案）　　矢印は来場者（車の動